

八街市 実践的防災教育総合推進事業

「生徒たちが支援者「共助」としての視点から、被災地への災害ボランティア活動等を行うことを通じて、自覚を促し、地域の一員として貢献する意識を高める。」

八街市教育委員会学校教育課 043-443-1446

指導主事 湯浅 誠

1 実践事業

- (1) 災害ボランティア活動の推進
- (2) 防災に関する指導方法の工夫

2 事業概要

生徒が災害発生時の物的・人的備えに加え、「共助」の根幹となる心の備えを醸成していくための活動とする。被災地への実際の訪問、全校生徒への伝達、全校を挙げた復興支援へと繋げることにより、継続的なボランティア活動を形成していく。

また、上記活動を通じ、自らが被災した時を想定し「自助」「共助」の在り方の具体的な姿を学習し、防災に対し、主体的に行動する態度を育成する。

3 実施概要

実施時期	計 画 事 項	参加者
5/30	○第1回実践委員会 ・活動予定について	実践委員
7/4	○災害ボランティア関係者の講話（塩竈市ボランティア団体代表：會澤純一郎氏）	防災アドバイザー 全校生徒 実践委員 教職員
9/24	○第2回実践委員会 ・取組の検討、ボランティア訪問事前打合せ	実践委員

実施時期	計 画 事 項	参加者
10/3 ～4	○被災地ボランティア訪問 （宮城県塩竈市） ・南三陸町防災庁舎跡慰霊 ・大川小学校跡慰霊 ・東松島市仮設住宅訪問	防災アドバイザー 生徒会 吹奏楽部員 ボランティア部員 教職員 社会福祉市教委
10/23	○被災地ボランティア訪問校内報告会 （南中体育館）	全校生徒
11/15	○被災地ボランティア訪問報告会 （南中体育館）	全校生徒 教職員 地域住民 教育長 社会福祉市教委
11/23 ～12/26	○被災地へ向けたメッセージ活動 ・ペットボトルツリー作成（被災地復興への願いを記入） ・ビデオレターの作成	全校生徒 地域住民 市教委

実施時期	計 画 事 項	参加者
11/27	○市内福祉、一般市民、 教育関係者に向けて 活動報告会	関係生徒 市長 教育長 地域住民 社会福祉 市教委
12/5	○第3回実践委員会 ・事業の検証 ・今後の実践的防災教 育活動について	実践委員

4 実践委員会

	氏 名	所属等
1	會澤純一郎	防災アドバイザー
2	三橋 貴司	県教育庁北総教育事務所指導主事
3	齋藤 勝美	市社会福祉協議会会長
4	綿貫 敏宏	市社会福祉協議会事務局
5	井口 安弘	市防災課主幹
6	宇津木高志	八街南中学校長
7	有賀 享	八街南中学校教頭
8	近藤 貴宏	八街南中学校教務主任
9	熊澤 宏明	八街南中学校研究主任
10	中川 隼仁	八街南中学校安全主任
11	清水 誠	八街南中学校PTA会長
12	関口 裕之	八街南中学校PTA副会長
13	日暮 照雄	川上地区後援会会長
14	麻生 信也	二州地区後援会副会長
15	湯浅 誠	八街市教育委員会学校教育課指導主事

5 具体的な取組

(1) 第1回実践委員会

平成26年5月30日(金)

15:30～ 於：八街南中学校

①協議等

- ア 事業説明及び役員の選出
- イ 協議「今後の活動予定について」
 - ・訪問被災地の決定
 - ・ボランティア活動日及び行程
 - ・活動内容について(吹奏楽部演奏・ボランティア部物品配付活動)
 - ・参加人員について

(2) 防災アドバイザーによる講話

平成26年7月4日(金)

14:00～ 於：八街南中学校

會澤純一郎氏

(塩竈市民ボランティア「希望」代表)

①演題『被災地の現状と課題』

②対象：南中生徒440名、地域関係者20名



(3) 被災地派遣ボランティア活動

平成26年10月3日(金)

～4日(土)

- ・訪問場所：宮城県南三陸町・石巻市東松島市
- ・参加者数：生徒45名、引率者9名
- ・視察場所：南三陸町合同防災庁舎
：石巻市立大川小学校
：東松島市グリーンタウン(仮設住宅)



【會澤純一郎氏より】

被災地を見るということは…

- ①東日本大震災の被害状況を理解して、自分のできる支援を考える。
- ②自然の大災害の恐ろしさを学ぶ。
- ③自分と町の防災意識の大切さを学ぶ。

※「現地をよく見て、感じて、被災者の話を聞いて、考える。」ことが大切である。

※被災地を訪れることは自分の生き方の発見である。

① 行程

- 10/3 20:00 八街南中学校 発
- 10/4 7:30 南三陸町合同防災庁舎視察
慰霊
- 9:00 石巻市立大川小学校視察
慰霊
- 10:45 東松島グリーンタウン
仮設住宅訪問
- ・吹奏楽部による演奏交流会
 - ・八街市及び南中ボランティア部作成の地産物配付
- 12:30 全体式
- 13:00 昼食
- 13:45 学校に向け出発
- 20:30 帰校・解散

震災から3年6か月経った今でも、なかなか復興が進まないまちの様子を実際に見て、生徒たちは様々な思いをめぐらしていた。

南三陸町防災庁舎の跡地では、防災アドバイザーである會澤さんから想像を絶する現実の話聞きながら、庁舎の折れ曲がった鉄骨等を見て、津波の高さや恐ろしさを感じ取っていた。

大川小学校跡地では、校庭や残された校舎のたたずまいを見ながら、当時の犠牲になった児童の様子を思い描き、どのような対応が必要だったのか考えているようであった。

東松島市グリーンタウンでは、吹奏楽部員が仮設住宅の方々へ、ともに歌って踊って楽しめる心のこもった演奏を披露した。その後、生徒たちは八街市及び南中ボランティア部作成の地産物（野菜ジュース・みそピーナッツ・菜の花の種等）を配付しながら、仮設住宅の方々と温かい言葉がかわされている様子がかがえ、大変満足した表情だった。

②事後指導

ア 作文方式による活動報告書の作成
(作成項目)

- (ア) なぜこのボランティアに参加しようと思ったのか
- (イ) 被災地を視察してどのような感想を持ったか。
- (ウ) 活動を体験して感じたことは何か。
- (エ) これからできること、しなければならないことは何か。

イ 校内及び学区の地域住民への活動報告会の開催

- (ア) スライドショー画像の作成から発表
- (イ) 代表者による感想の発表
- (ウ) 画像を含んだ掲示物の作成
- (エ) 発表を聞いての在校生の感想と感想文の掲示



ウ 一般市民・教育・福祉関係者に向けての活動報告会の開催

「八街市社会福祉大会」における
福祉体験発表

平成26年11月27日(木)

13:30～ 於：八街市中央公民館

出席者：市長をはじめ市内各官庁、教育、福祉、安全協会等の諸機関及び一般市民

テーマ：『被災地との心の交流

～“元気”のバトンパス～』

(ア) 吹奏楽部員による演奏

(仮設住宅で行った演奏の一部を披露)

(イ) スライドショーを用いた体験報告



報告会の中で、「とても貴重な体験をさせていただいた今、自分たちにできることは、まず、被災地で感じたことや現状を皆様に伝えること。」「東北の被災地は復興が少しずつ進んではいるものの、未だに厳しい状況にあり、津波による災害の大きさは想像を絶するものであった。しかし、被災地の方々はこの逆境にもかかわらず、復興に向けて力強く、たくましく生き、私たちを温かく迎えてくれたことが心に残っている。だから、私たち一人ひとりが灯りとなり、東北の被災地を照らしていかなければならない。東北の今は、私たちの今。東北の未来は、私たちの未来。」と述べていた。

また、参加した生徒たちから、「ボランティア活動に参加して良かった。」「いろいろなことを感じ、生き方について考えさせられた。」「今後も、何らかの形で被災地のために関わっていきたい。」という感想が寄せられた。この活動を通して、社会づくりに貢献しようという意識が高まったようである。

(4) 成果と課題

【成果】

- ①復興がままならない現地へ足を運び、災害アドバイザーの話聞き、被災地の方々との関わりから、自然災害の恐ろしさや復興の大変さや災害にみまわても力強く生きている姿を自分の目と耳で実感することができた。また、実際その地に立って見ることは絶大なる説得力を感じることができた。そして、一人ひとりが災害を自分にも関係することとしてとらえ、防災やボランティア活動への関心を高めた。
- ②実際にボランティア活動を行い、自分たちも役に立つことができるという達成感を得ることで、社会のために「気づき、考え、実践できる」という意識が高まった。
- ③命の大切さや困っている人たちに対する思いやりの気持ちを養うことができた。
- ④ボランティア活動を通じて学んだことを全校生徒や保護者、地域の人たちに発表する場を設けることで、社会づくりに貢献する意識を高めることができた。
- ⑤ボランティア活動に参加できなかった生徒においても、報告会を見たり聞いたりすることによって、自然災害の恐ろしさを知り、防災やボランティア活動に対する関心が高まった。



【今後の課題】

- ①生徒たちが支援者「共助」の視点から、災害ボランティア活動を通じて育んだ知識を、今後、地域の一員として貢献できるよう、学校・地域・関係機関が連携した学校防災体制の充実を図る必要がある。
- ②今後、東北への災害ボランティア活動を継続した取組としていくためには、予算措置について課題がある。多くの生徒がボランティアに参加したいという思いが強いのに反して、生徒を絞ってボランティア活動に参加せざるを得ないのが現状である。八街市としても当該校においても、今後も、今回の実践を生かし、息の長い取組と自助・共助の意識を高めた防災教育の推進を充実させたい。そのためにも、継続した取組ができる方策を構築していかなければならない。
- ③前日の夜8時に出発し、当日の夜8時に帰着で、深夜バス内での仮眠をとるという強行日程なので、生徒・職員ともに健康的な面において負担が大きい。



ペットボトルのリサイクル活動を通して環境問題への意識を高めると同時に、東日本大震災の犠牲者への追悼と被災地の復興を祈念し、さらに青少年が自らの命を大切にする心や他人を思いやる心を育むための機会として作成したもの。